

地域づくりスタートアップ期を担う大学の役割 ～東かがわ市での実践を通して～

長尾 敦史

- I. はじめに
- II. 域学連携
- III. 実践活動
- IV. 香川大学が地域に与えた影響

I はじめに

香川大学では、2013年度より文部科学省「地（知）の拠点整備事業（以下、COC事業）」の採択を受けて香川県内の7市町および香川県と連携し、地域の課題解決を図る取り組みプロジェクトベースで行ってきた。プロジェクトが解決すべき課題は多種多様であり、自治体ごとに活動の範囲や領域が異なる。その中の一つのプロジェクトとして香川県東かがわ市でのプロジェクトを事例として取り上げる。これまで本学における香川県東かがわ市での調査研究については、研究室単位や企業単位では、いくつかあったが、自治体と本格的にスタートしたのは、2013年からである。東かがわ市でのプロジェクトを主に担当したのは経済学部原直行教授と筆者である。筆者は、地域連携コーディネータとして関わりスタートアップ期における課題や成功要因について身をもって体験することができた。

本稿では、初期の期間である2013年から2014年にかけての活動報告を行い、地域づくり萌芽期における大学の役割について考察したい。

II 域学連携

域学連携とは、地域と大学が連携して地域活性化策などの調査研究やまちおこしの実践活動を行うものである。具体的には、大学生と大学の教職員が地域の現場に入り、地域の住民の方々や関連する団体の方とともに、地域の課題解決や地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化および地域の人材育成に取り組む活動である。地域にとっては、大学の集積する知識、情報、ノウハウなどが活用される、地域で不足する若い人材の活用ができる、などの利点があり、大学にとっても、地域の方の人材育成、教育・研究活動の学生にとっても、貴重な社会経験になるという利点がある。東かがわ市での活動は、全学共通科目「瀬戸内地域活性化プロジェクト」の授業科目の一環で行われた。科目の全学的な位置づけや他の自治体プロジェクトについては、（鈴木ら [2018]）を参照されたい。

II-1 モデル地区の抽出

当初、東かがわ市から与えられた研究課題は、地域資源等を活用した新たな観光創造、雇用創出、産業育成等をはかり、東かがわ市全体の活性化に資する研究である。初年度から、市内全域を対象とするのは困難と考え、モデル地区を一つ選定し、モデル地区の現状分析および課題抽出、実証研究を行うこととした。

定住促進の観点にたてば、子育てのための教育機能・医療機能・商業機能の場が必要だと考えられる。また地域コミュニティの醸成の観点にたてば、地域づくりにおける地域リーダーの存在は欠かせない。地域協働における地域コミュニティの強化および若者を対象とした定住促進の実証研究として、今回、モデル地区の選定するにあたり、以下の3点を選定のポイントとした。

- [1] 複数自治会にまたがる地区
- [2] 教育機能のうちエリアの中の小学校が廃校になっている地区
- [3] エリアマップなどガイドマップなどの発行経験がない地区

選定ポイントの結果から、旧引田町相生地区をモデル地区として活動を行った。相生地区は農村で、人口2,127人、高齢化率43.6%（2015年国勢調査）である。かつては、その地形を活かし、漁業や製糖業で栄えた地区である。地域コミュニティ協議会は2013年4月に地区内にある8つの自治会を中心に設立された。設立当初より東かがわ市から指定管理を受けて、コミュニティセンター（小学校跡地）の運営と管理を行っている。

Ⅲ 地域実践活動

Ⅲ-1 2013年度

2013年度における相生地区での地域実践活動は、以下の通り実施した。

- (1) 2013年6月・・・第1回フィールドワークの実施
香川大学の学部生を中心に約30名で東かがわ市全域を網羅する形で調査を実施した。
- (2) 2013年6月－9月・・・地域産品をテーマにした商品開発『わさんぶる』
- (3) 2014年12月－3月・・・『相生マップづくり』

(1) 第1回フィールドワーク

調査日：2013年6月15日（土）

参加者：大学院地域マネジメント研究科 教員ほか2名

各学部 学生24名

大学院地域マネジメント研究科 学生4名

調査内容：

香川大学の学部学生ら30名で、東かがわ市のフィールドワークを実施した。実施した内容は、観光資源調査、施設見学、モデル地区でのグループワークである。

午前中は、安戸池・海と魚の体験学習館（マーレリッコ）の施設見学、引田町にある井筒屋敷や街並みの観光資源調査を実施した。

また午後からは、東かがわ市相生コミュニティセンターにて、香川大学学生、相生ふるさと協議会、NPO東かがわニューリズム協会、市役所職員で6人1グループとなりグループワークを実施した。

地元の人から相生の『いいところ』についてお話を伺った。その中で外から来た学生からすれば面白い話がいくつもあげられた。この日、地元の方から得られた意見としては①歴史や自然に関するモノが地域資源である、②子供のための活動を起こしたい、③コミュニティビジネスは可能ではないかということが上がった。



(相生地区でグループワークの様子)

◎グループワークで抽出した地域資源

人材	地域の方々など
文化	寺社、義経伝説、南原繁東大元総長など
施設	相生コミュニティセンター、翼山温泉など
自然	瀬戸内海、大坂峠、千足ダム、川俣ダム
コミュニティ	相生ふるさと協議会
食	和三盆、イチゴ

(2) 地域産品をテーマにした商品開発

実施期間：2013年6 - 9月

開発メンバー：学生5名（法学部1名、経済学部3名、農学部1名）

①開発の経緯

讃岐和三盆の発祥の地は、引田町相生地区である。高松藩主、松平頼恭の命により医師、池田玄丈が砂糖づくりを始め、弟子の医師、向山周慶により製糖技術が発明され、白糖の製造を可能にした。これにより塩・綿と並ぶ讃岐三白の一つである讃岐和三盆糖の製造技術が確立し、現在も香川県の名産品の一つとなっている。これら定番ともいえる地域資源を若者目線による新商品の開発により東かがわ市を盛り上げることを目的とした。

②事業内容

学生は、若い人たちに東かがわ市のよさを知ってもらい、もっと多くの人に伝えたいという思いで、地域の人と一緒に計画した最初のお祭りである相生ふるさと村まつりに向けて、相生の特産品である讃岐和三盆を使った商品の開発を2013年6月から実施した。何度も試作を行い製作した。「わさんぶる」は、和三盆のアンサンブル、すなわち和三盆をつかって様々な食品を組み合わせアンサンブルを生み出す、また東かがわ市と香川大学が様々なコラボレーションする、という意味を込めている。実際に「わさんぶる」では、東かがわ市内の3つの業者、高松市内の1業者との協力のもと、商品が開発されている。食パンの「和三盆ブレッド」を焼いてその上に「和三盆アイス」をのせてクッキーをトッピングし、「和三盆黒蜜」をかける和三盆づくしのスイーツである。

完成した商品は、第1回相生ふるさと村まつりにおいて、披露した。



(わさんぶる販売コーナー)



(わさんぶるセット)

(3) 『相生マップづくり』

実施期間：2013年12月 - 2014年3月

①いいところ探しによる地域コミュニティの活性化

これまでの行政スキームは、行政側が先にアイデアを作り、それを地域に育ててもらう仕組みが多い。しかしそれでは、住民が主体になりにくいケースが多く、地域の主体性が育ちにくい。そこで、地域の方々にアイデアを出してもらい地域コミュニティ組織が主体となって地域の課題を解決する仕組み作りが必要となる。その前段階として地域協働を推進するための地域コミュニティの支援、つまり地域が自らの課題を解決する活動を支援する必要がある。具体的には、ワークショップやフィールドワークを通じて地域コミュニティが自ら地域の課題を解決する方策を考える。相生地区において、「いいところ探し」を中心に地元の方々のワークショップやインタビューによる調査を行い、学生との協働マップづくりを行った。

・「いいところ探し」の効果

相生地区には様々な地域資源があるが、地元の方の中には、その魅力に気付いていない人も多い。今回、地元の方と学生と交流を通じた「地域資源」探しを行った。一緒に実地調査することで一体感が生まれるなどの効果がある。良い点を評価して協働の形によるマップづくりといった作業は、地域コミュニティを醸成させる上で重要な主体形成能力の向上が期待できる。

・「マップづくり」の効果

地域の方々がもともと興味をもっている地域資源について評価することができる、高齢の方々の話を聞く中で、地域の歴史的な背景を再確認できるといった効果がある。また地域資源に関する情報をもっている世代が高齢化しており、資源を後世に残す作業としての効果が期待できる。

11月・・・第1回いいところ探しスタート

1回目は相生地区の地図を使いワークショップを実施した。相生地区の地図に色分けされた付箋で季節ごとの「いいところ」を抽出する作業を行い、3つグループに分かれ地図に落としこむ作業を行った。2回

目のワークショップは実際にそのいいところを地元の方と歩いて回った。それぞれの「いいとこ」で地元の方は思い出があり、面白いエピソードや言い伝えが残っていることを知ることができた。また、和三盆の糖業が根付いていたことからその名残も見ることができた。歩いて回っている際にも地元の人にとっては当たり前の景色も外から来た学生にとっては新鮮な景色に写っていた。

12月以降・・・複数回にわたるフィールドワークを実施

同様にフィールドワークを行いMAPに取り上げる写真撮影を行っていった。この時期から地元の方との意見の交換が活発になっていった。1月、2月のワークショップでは、MAPの具体的な体裁を作り、噂を軸とするコンセプトで地元の方々の思い出や言い伝えなど、地域のソフトな部分を中心にまとめた。その後はMAP掲載の許可などを各方面にいただき、地元の方と推敲を重ね、2013年3月にMAPは完成した。



(学生による調査発表)



(住民とのワークショップ)



(フィールドワークその1)



(フィールドワークその2)

Ⅲ-2 2014年度

2014年度における相生地区での地域実践活動は、以下の通り実施した。

- (1) 2014年6月-10月・・・MAPに連動したCMづくり
- (2) 2014年9月-11月・・・相生むら歩き

(3) 2014年9月・・・相生ふるさと村祭り

(1) MAPに連動したCMづくり

相生ふるさとMAPに掲載されている場所や名所をよりひろくPRするため、CMづくりを行なった。CMづくりは、製作の過程で地域資源の再発見や、必要な構図を考える中で地域を新しい視点で見ることが可能である。また、作成したCMは情報発信のツールになる。実施したスケジュールは以下の通りである。作成したCMについては、2014年11月23日に東かがわ市交流プラザで開催された「東かがわ市ふるさとフェアat相生」にて披露した。2014年2月24日に相生コミュニティセンターで開催した成果報告会（兼香川大学サテライトオフィス）の中でも披露した。

実施スケジュール：

- 6月16日 CM構想会議（学内）
- 6月21日 CM構想会議（相生地区）
- 6月30日 CM作成会議（学内）
- 7月～9月 CM撮影
- 9月～10月 CM編集

(CM構想会議・CM撮影)

製作過程では、地域住民とCM作成会議を行なった。撮影ポイントについては、事前に学生が地域の情報を調べたうえで2～3人のグループをつくり、各地区の地域住民にインタビューをする形で選定した。インタビュー後は、撮影ポイントのフィールドワークを実施した。



(CM構想会議の様子)



(CM撮影の様子)

(2) 相生むら歩き

①相生むら歩きイベント『馬宿地区スタンプラリー』

相生ふるさと村まつりの開催期間中に連携する形で、あいおいむら歩きを2014年9月28日に馬宿地区において実施した。実施したスタンプラリーのスタンプについては、学生が馬宿地区をイメージした消しゴムハンコを作成した。当日は、馬宿地区にすむ住民にもアドバイスをもらいながら、ツアーガイドを行った。

ここでの経験を活かし2014年11月24日、11月30日の計2回、てくてくツアーを開催した。



(地域住民と馬宿地区を案内)



(参加者との集合写真)

②てくてくツアー『和三盆の里で偉人さんにあう』

あいおいむら歩きプレイベントでの経験を活かし、NPO東かがわ市ニューツーリズム協会と連携し、てくてくツアーを実施した。いずれの回も学生がツアーガイドを行った。ツアー参加後は、相生コミュニティセンターにて、和三盆をつかったスイーツ「わさんぶる」の提供を行った。

実施日：11月24日 10時～12時20分

11月30日 10時～12時20分 ツアー距離 4 km

集合場所 相生コミュニティ・センター駐車場（東かがわ市南野204-1）

料金 1,000円（スイーツ、保険料込）

(3) 相生ふるさと祭り

昨年度に引き続き、相生ふるさと村祭り（9月27日、28日開催）に参加した。今年度は、昨年度に引き続き香川大学ブースの設置及び踊りの披露を行った。旧引田町の3つの地区に伝わる盆踊りを地元の婦人会と練習し披露することにした。披露した踊りは、いぐさ音頭（小海地区）、通賢音頭（相生地区）、影山おどり（引田地区）である。

また、相生出身の笠置シズ子生誕百周年を記念して「東京ブギウギ」を復活させ、ふるさと村まつりで披露した。



(相生ふるさと村祭り)



(東京ブギウギを披露)

IV 香川大学が地域に与えた影響

2013年度は、相生地区において「いいところ探し」を中心に住民とワークショップやインタビュー調査を行い、学生との協働マップづくりを行った。

これらは地域住民が地域の隠れた資源について評価することや、地域の歴史を再確認できるといった効果が期待できる。また、地域資源に関する情報をもっている世代が高齢化していく中で、それらを整理することは資源を後世に残す作業としての効果が期待できる。

2014年度は、MAPを使いたいくつもの取り組みを行なったが、発展的な形として大学や行政側が提案せずに住民自らが行なった活動を見ることができた。そのうちのいくつかを紹介したい。一つ目は、案内板の設置である。二つ目は、JR讃岐相生駅に設置されたパンフレットラックである。地域住民自ら看板を設置するなどの主体形成、地域に対する「誇り」、「愛着」の醸成が確認できた。筆者はこれからの地域づくりにおいて、「自分たちはこんなことがしたい」など色々なプランが主体的に出てくるような主体形成が重要であると考えている。

香川大学では、住民にアイデアを出してもらい、地域コミュニティ組織が主体となって地域の課題を解決する仕組み作りができる土壌づくりを積極的に行ってきた。その成果が出た一つの事例である。



(住民が自主的に製作した地域資源の案内看板)



(讃岐相生駅に設置された住民自主作成のラック)

[参考文献]

- ・鈴木健大・原直行・古川尚幸・西成典久・山田香織 (2018) 「全学共通科目「瀬戸内地域活性化プロジェクト」における実践と教育効果に関する検証」『香川大学教育研究』, pp175-188
- ・吉本哲郎 (2008) 『地元学をはじめよう』岩波ジュニア新書
- ・小田切徳美 (2009) 『農産村再生』, 岩波ブックレット
- ・小田切徳美 (2014) 『農山村は消滅しない』, 岩波新書
- ・原直行 (2016) 「住民による地域づくり活動の必要要素と活動評価に関する研究」『地域活性学会2016年度研究大会論文集』
- ・原直行 (2017) 「住民による地域づくり活動と創発戦略」『地域活性学会2017年度研究大会論文集』
- ・長尾敦史・原直行 (2018) 「地域づくりと大学の役割」『地域活性学会2018大会論文集』